

(いるはずの友人たち

森のざわめきは消えた)

Sueño de agua turbida

孤独なわたしの魂は別れを告げる

人生は短い、とひとは言う。大地の

みのりを飲み食べよう

踊ろう、わたしたちはもう

鳥のように軽やかになったのだしと。

わたしは言う、去る前に、女の心臓を

囁もうと

(先祖たちがしたように)

そして歩きまわろう、顔を

葉と花で覆って

蛇たちには絡みあうように頼もう

丘が抱いている夢をわたしに

話してくれるように

下の大地からもうミノゴイが

やってきた

さようならわたしは行くよ、なにか

いい思い出はあるかい？

施療師がわたしの旅立ちを泣くのを聴く

わたしの孤独な魂は言うだろう、すぐに、さようならと

日没の方角に沈みながら。

Mi alma solitaria dice adiós

この地にわたしのものはなにも残らないだろう

この地にわたしのものはなにも残らないだろう、と自分に言う

この地の空気には、月とわたしの会話だけ

この地の水には一輪の花だけ。記憶の軽さ。

Nada de mí quedará en esta tierra

ランプと跳ね橋の下で

わたしは青いチューリップが見えたと思った、風車の

羽根が飛ばたくのを

わたしたちは飛びたいのだ。行こう、何にも

わたしの夢が乱されませんように——自分に言う

そしてわたしは雲に身を任せ、わたしの心臓が

知らない場所へと運ばれていく。

Sueño azul

月はきみの名を持つかもしれない

あなたのからだは自然ねときみは言う

別れの日に

公園の木々に救われたわたしだから、

きみが視るものについて西の反対側に

話せる日はこないかもしれない

それはわたしの苦しみがヒロシマの爆弾がたてる

恐ろしい音のようだから、

どうだろう、ときみに返す。わたしは今でも

一八八三年のわれらの野のうえにいる

死んだ先祖たちを見つめている、

いのちへの讃歌のなかに

疑いもなく、両方とも同じことを言うだろう、

静かにと

森を行く

足音のように神聖な静けさをと

日が暮れてわたしの言葉のなかで

小雨が立ち止まる

天では、彼方では、黄金の家で

月とわたしが、輝きながら青い嵐の目に

横たわっている。

La Luna puede tener tu nombre

濁った水の夢

だがわたしの魂のなかでは——夢のなかの話——混乱の

音楽が

翼を揺すり、わたしには娘たちも

妻も見えない

両親も。そして時間と場所は

サンティアゴ・デ・チレの地下鉄

めまぐるしく閉じては

閉じる扉

——ふたりはわたしにそう話した

秋になると入江が輝きはじめ

水の精霊は石だらけの川面の上を

動きまわる

水は大地の眼から立ち現れる

わたしは毎年自然の目を見張るような儀式に

参加しようと山へ走った

やがて冬が訪れ新たな夢と播種にそなえ

大地を浄化した

ときにはミノゴイが飛び回って

病や死を報せた

苦しい気持ちになった、慕っていた

年長者の誰かが

祖先たちと会い

青い国で喜ぶために

死の渡し守を呼ぼうと

涙の河の

岸辺へと歩いていかねばならないと思うと

ある朝わたしの兄カルリートスが旅立った

小雨だった、灰色の日だった

わたしは夢想の森で

惑うために出かけた（今もそのなかを歩いている）
入江の音が秋にはわたしたちを抱きしめる

きょう、わたしの姉妹レジェンとアメリカに言う、

詩は平和に息をすることに他ならない

天のダチヨウのように大地のあちこちを

わたしのかなしい想念を漂わせる間に。

——われらがホルヘ・テイジェルが思い出させてくれたことだ

そしてガビ、カウイ、マレンとベティに話していく

いまわたしは月の谷にいる、イタリアだよ

詩人ガブリエレ・ミリと一緒にだ

いまフランスにいる、兄のアラウコと一緒にだ

いまスウェーデンにいる、フアニート・カメロンと

ラッセ・ソダーバーグと一緒に

いまドイツにいる、親愛なる

サントス・チャベスとドリスと一緒に

いまオランダにいる、マルガと

ゴンサロ・ミリヤンとヒメナ、ヤン、アフケ

ファンそしてカタと一緒に

雨が降る、小雨が降る、黄色い風が吹く

アムステルダムで

運河が輝く、古風な鉄製の

守護の力、火山、花そして鳥を。

祖父とも多くの

夜を露天で過ごした

長い沈黙、長い物語で

われわれ部族のはじまりのこと

青から投げ落とされた最初のマップチェの魂

無限のなかに星のように吊るされた

魂のこと

祖父はわたしたちに天の道、川、

しるしを教えてください

春の訪れごとに耳のうしろと

上着の襟に花をさして歩く祖父を見た

朝露を踏みながら裸足で歩く姿も

雨をつき馬に乗って行く姿も思いだす

激しい雨 巨大な森を抜けて冬

祖父は瘦身に力強い男だった

小川、森、雲のあいだをさまよって

季節が巡っていくさまをわたしは見る

冷たい月（冬）の若芽、緑樹の月

（春）

最初に実った果実の月（晩春と

初夏）

たわわな果実の月（夏）

そして灰赤の若芽の月（秋）

わたしは母、父と一緒に

薬草とキノコを探しに出る

ミントは胃、レモンバームは

悲しみに

マチコは肝臓と傷に

クコは腎臓に——母は言いながら行く

踊る、踊る、山の薬草は

——と父がことばを添える——

わたしの手の間に

立ち上げながら（わかるように手に取らせてくれる）

そうしてわたしは花や植物の名を

学んだ

昆虫はおのが役目を果たす

この世に無駄なものはないにひとつない

宇宙は二元で

善は悪なしには存在しない

大地は人間のものではない

「マップチェ」とは大地の人ということだ

冬には春のミモザ——ウルモ

の蜜の甘みを持つ太陽——

ハチドリが群がるフクシア・マゲラニカもあったが
現実か幻かわたしたちにはわからなかった

なんと儂いものか！

冬には樫がまっぶたつに裂けて倒れるのを感じた

雷のせいだった

夕刻になると外に出た、雨のときも

茜色の空のときもあった、羊を迎えに行くのだ

(どれかの死に涙することもあった

河渡りのときに)

夜になると歌、物語、

予見を炉辺で聞いた

祖母、母、ときにはマリアおばさんが作った

パンの匂いを吸いこみながら

その姿を父と祖父——コミュニティの

長——は用心深く敬意をこめて見ていた

わたしが話しているのは自分の子供時代のこと

架空の社会のことではない

あそこで詩とはなにかを学んだと思う

日常の暮らし、とりわけその

細部の偉大さを

炎の、眼の、そして手の閃きを

祖母の膝に座ってわたしは

木々のはじまりの話を聞いた

互いに話し、動物や人間と

言葉を交わす石たちのことも

これでおしまい、とわたしに言ったものだ、しるしを

読み解くことを学ばなければ

ふだんは風に隠れている音を

感じとることを学ばなければと

いまのわたしの母と同じく、祖母は物静かで

なにもものにも乱されない忍耐力を持っていた

わたしは彼女が歩きまわる姿をよく見た、錘つとを

まわし、羊毛の白さに縊りをかけていた

その糸は夜の機織りを経て

美しい織物に姿を変えていった

兄弟姉妹のように——一度

ならず——わたしもその技術を身につけようとしたがうまくいかな

かった

しかし模様の意味は

記憶している

創造とマブチエ世界の

再起を語ったものだった

ことばよりも先に

そして花よりも先に存在したと

(しかもさらに遠くに)。

わが娘たちのために建てるのは

あの銀の家

風に

髪をなびかせ

わたしは虹の上を騎行する

わたしはほとぼしる水

この身のなかで海は眠りともに行く

山は目覚める

それはわたしが名もなきものの

力だから、とそれは言う

太陽の冠はおまえの歌だ。

Porque soy la fuerza de lo innombrado

誰もなくさなかつた鍵

詩はなんの役にも立たないと言われた

森では木々の青い根が愛撫を交わし

枝えだを空に震わせる

鳥とあいさつする

南十字星

詩は殺された人びとの

深い囁き

秋の葉すれ

あのことばを手放さず

しかし魂を失ってしまった

若者のための悲しみ

詩は、詩は身振り、風景

おまえの眼わたしの眼だ少女よ

耳と心臓、あの同じ音楽

さあわたしの話はこれで終わりだ

誰もなくさなかつた鍵は

誰にも見つけることはできないだろうから

詩はわたしの先祖たちの歌

このあまりにも個人的な憂いを

燃やし消すあの冬の日。

La llave que nadie ha perdido

青い夢

わたしが生れた青い家は丘のうえにある

オーク、一本の柳、栗や胡桃の木々に囲まれている、

「青い夢」他七篇

この谷で夢見ることはいまも願う

雨が微風の弦を引き締める

そして上方の合唱隊が投げかけるのは

豊穣の音。

たくさんの動物がいた——と言挙げていく——

山、湖、猛禽、よきことばたち

わたしは目を閉じたまま歩みを進める。

わたしのなかにあの老人が見える

おのれの子供時代に棲み

蝶たちの帰還を待っているのだ

年は聞くな——と言ってくる——

それならわたしは満足だと。

エリクラ・チウアイラフ
三角 明子訳

存在しないものを声に出すのはなんのためか？

記憶の活力のなかに大地は生きる

そして大地のなかに祖先たちの血が

わかるか、わかるだろうか、——と言う——

なぜ

この谷で夢見ることはいまも願っているのかを？

Aún deseo soñar en este valle

わたしは名もなきものの力だから

盈月の夢を見た

とそれは言う、

地を耕したと。